

目的 モンテッソーリ教育には治療教育的な視覚が存在するといえる。それはM・モンテッソーリの精神薄弱^遅教育の^遅実践と深い係わりを持つものと考えられる。本研究では、モンテッソーリ教育の治療教育的視覚について検討を加えようとするものである。

方法 文献による考察。

結果 M・モンテッソーリは、子どもと子どもをとりまく環境との関係を「対立的で固定的」にとらえているがために、なによりも環境としての物と子どもとの2者関係が先行し、「教師と子どもとの全人格的融れあいが後方に退く」ととらえられている。また、「子どもたちを『幼児の家』という整備された環境にいったん避難させ、そこで正常化がなされる。現実に生活している子どもと『幼児の家』の子どもは全く異なるものである」と批判される。(河部真美子「モンテッソーリの『幼児の家』の成立とモンテッソーリ運動の発展」— 世界教育史体系 22, 講談社)

しかし本研究においては、モンテッソーリ教育が環境としての物—教師—子どもとの3者関係を治療教育的にとらえていたと考える。これはまさに3者の全人格的関係への考慮なしにはありえないものではないだろうか。この様な視覚からモンテッソーリ教育についての知見を述べたい。